原書"Flowers for Algernon"の世界

関　　典夫

ダニエル・キイスの作品には、人間の心の問題をテーマにしたものが多い、『アルジャーノンに花束を』の中の世界にも、主人公であるチャーリー・ゴートンを通してありとあらゆる心の問題がでてくる。

チャーリー・ゴートンは、37歳の男性なのだがＩＱ（知能指数）は68しかない。しかし生来の人の善さから陽気に暮らしていた。ところがある特殊な脳外科手術を受けて、ＩＱが３倍になり、大天才となる。チャーリーに突然、新しい世界が開けるのだが、対人関係を含めてその世界は彼にとって苦しみでしかなかった……というストーリーである。

話は単純だけれども、これが全部、主人公の手術の経過報告という日記形式で書かれているところが面白い。ＩＱ68しかない初めの頃は、文章もたどたどしい。それが天才になってからは、手術の経過や自分の精神状態のことなどを論文のようにビシッと書いていく。これは、英語の原文で読むとよくわかるのだが、知能の低かった頃のチャーリーの文章は、スペリングや文法が違い、内容的にも簡単なのだが、大天才になってからは、英語そのものががぜん難しくなり読み取ることも難しくなります。しかし、作品を全部読み通してみると、作者はこのように変形したスペリングを通して、チャーリーのけなげな気持ちを知ってほしかっただろうし、気取った、難しい英語がどこか中身のない空虚なひびきに感じられるのに気が付くはずです。

チャーリーは初めまわりにバカにされていても、それは自分のことが好きだからだと思っていたのだが天才になっていろんなことがわかってくる。しかも天才になったチャーリーから、話があわないとか、近寄りがたいといった理由で、まわりの友達がどんどん遠のいていった。天才にはなるのだが、チャーリーの正直で素直な気持ちがどこかへ消えてしまい。孤独になり、うたがい深くなり、不幸になっていく。こうして見ると知能が高いことは好ましくないようにもとれてしまうのだが、作者が言わんとしたのは、人間の心を持たなかったり、あるいは愛したり愛されたりする感情のない天才は、人間の形はしていても真の人間にはなれないということだと思う。それは、知能が高くなったことで精神的にも確かに成長し、強い心を持てば何事にも立ち向かっていけるという反面で、幼なく純粋な心をだんだんと失なっていくというさびしさを同時に心の中のどこかに、つくりあげてしまうということではなかろうか。

（指導教員　中村　敦志）